

『鰯地蔵』

「おい、聞いたかい。豆腐地蔵の話だよ」

「豆腐地蔵？ この町内のはずれにある、あの地蔵のことか？」

「そうだよ。お前あれが流行ってんの知ってんだろ？」

「流行るって。地蔵が流行るってのはおかしいじゃねえか。まあ、それなりに人は訪れてるみてえだけだよ」

「そうだよ。あれがあるもんだから、隣り町内だとか遠くからわざわざお供えに来る人もいるぐれえだよ。流行ってんだよ」

「まあそういう意味じゃ流行ってることになるかもしれねえけど。それがどうしたんだよ」

「聞いたんだよ。あの豆腐地蔵のからくりをよ」

「からくり？ なんだその地蔵のからくりってのは」

「お前、あれがどんなご利益があるか、もちろん知ってんだろ？」

「まあな。あの地蔵に豆腐をお供えすると、赤んぼの夜泣きがなくなるってんだろ？ まあ知ってるけど、おれたちには関わりがねえ話だよ。赤んぼなんかいねえからな。一度もお供えなんかしたことねえもの」

「おれもそうだったんだよ。でもな、聞いたんだよ。あの地蔵はずいぶん若手の地蔵らしいんだ」

「なんだ若手の地蔵って。なにを言ってんだ」

「いやよ、今日たまたまな、のりやのばあさんとあの豆腐地蔵の話になったんだ。孫が生まれたってえから、よく行ってるらしいんだよ。で、聞いてみたら毎日のようにあの地蔵にお供えしてるってんだってよ」

「へえ。毎日？ そんなに夜泣きが酷いのかね。でも毎日行くってことは夜泣きがなくなってねえんじゃねえか？」

「や、そ、そこはいいんだよ。どうでも。とにかく話を聞いてたら、あの豆腐地蔵ってのはずっと昔からあそこにあるもんじゃねえらしいんだよ。何十年か前にポツと置かれたもんらしいんだ」

「そうなの？ それは知らなかったね。おれらが生まれた頃にはもうあったからな。てっきり何百年とずっと昔からあるもんだと思ってたよ」

「違うんだよ。どうやらあれは、あの近所にある豆腐屋がこさえたもんらしいんだ」

「豆腐屋が？ なんだってまた地蔵なんかをこしらえたんだ？」

「分からねえかい？ あれがあるから豆腐屋が繁盛したんだよ。つまりな、豆腐地蔵をあそこに置いたことで、豆腐が売れるようになったんだ」

「そういうことか。何十年か前に、何代前かの豆腐屋があれを置いたがために、お供えするためにみんな豆腐を買ってったと、そういうことか？」

「そうなんだよ。なかなかこれ見事な話だよな？」

「言われてみりゃそうだねえ。あの豆腐地蔵をこしらえたのが、あその豆腐屋だったとはな。そりゃ知らなかったよ」

「な？ 夜泣きが関わりがねえからって、自分たちとは関係ねえって気にしたこともなかったろ？ どうやらそういう話らしいんだよ」

「ふーん。でも、なんでまたご利益を夜泣きってことにしたんだろうね」

「それは聞いてねえけど。あ、そうか。分かった！」

「なにになに？」

「そこも策略なんだよ。赤んぼの夜泣きはなかなかなくならねえだろ？ だから、むしろそれにしたんだよ。その方が何度も通ってもらえるから」

「なるほど。そういうことか。ああ、こりゃ確かにお前が言う通りからくりだな。うまくできてるよ。なんだか分からないことじゃなくて、夜泣きに効くってことにしたら、それを願う親が通うもんな。で、いつしか本当に夜泣きはなくなるから、当たり前のことなんだけど、ご利益があったってことになる。見事だねえ」

「だろ？ そういうことだよ。まあ夜泣きの件はおれも今、気づいたけど」

「うん。で、なに、お前はわざわざ、れをおれに教えに来てくれたのかい？ あの豆腐地蔵のからくりを？」

「あ、違う違う。そういうわけじゃないよ。なんでおれがお前にわざわざ親切にそんなこと教えてやらなきゃいけないんだ。そうじゃなくてよ。この話は使えるなと思ったんだよ」

「使える？ 何を言ってんだい？」

「だからよ、地蔵をこしらえて、豆腐屋が繁盛したわけだ。それは豆腐をお供えするということがあるからだろ？ これは使えるじゃねえかと思って」

「だからなんなんだよ、使えるってのは。何に使おうってんだい」

「だからよ。おれらも地蔵をこしらえてよ、一儲けしてやろうじゃないか」

「地蔵をこしらえる？ そんなこと出来るの？」

「出来るんだよ。おれたちも地蔵をこしらえてよ。大儲けしてやろうぜ」

なんだか妙な話がまとまりまして。自分たちの地蔵を置いて儲けてやろうだなんて。

「おい、遅えじゃねえかよ。どんだけ待たすんだい。言い出しっぺのお前が遅れたら困っちゃうじゃねえか」

「悪い悪い。色々と仕込みが必要だったからな」

「仕込み？ なにが？」

「まあ聞きなよ。あ、とりあえず、金物屋の元ちゃんだ」

「おお、誰か連れて来たなあと思ったけど、元ちゃんじゃねえか」

「あ、どうも。おはようございます」

「おはよう。なんで元ちゃんが来たの？」

「それをこれから説明するんだよ。いいか？ 昨日も話した通り、おれたちがやろうとしているのは、地蔵を置いてボロ儲け作戦だ」

「うん」

「これにはまず考えなきゃいけないのは、何をお供えする地蔵にするか、ということだ」

「おお、そうだった。儲けるったってな、そこが決まってねえといけねえもんな」

「そうだろ？ で、考えたんだが、豆腐地蔵は豆腐屋が豆腐をお供えすることにしたんだろ？ おれたちも同じ要領で、買ってもらえるようなものに決めなくちゃいけない」

「うんうん」

「で、おれは大工なんだよ。大工の場合、何かを買ってもらってことはねえやな」

「そうだな」

「な。で、お前が魚屋だ。魚屋なら商売だからいけると思って、鯛にしたよ」

「鯛？ 鯛をお供えするの？」

「そうさ。だってしょうがねえじゃねえか。おれたちがやってる商売の中から決めなくちゃいけないんだから。一番手頃なのは鯛だよ」

「あ、そう。まあ、うちがもし儲かるんだったら嬉しいけど」

「儲かるに決まってっじゃねえか。うちの町内で魚屋と言えば、お前のところなんだから。もうこれから鯛が大量に売れるんだよ」

「ほんとに？ すごいねえ」

「で、なんのご利益があるかってことなんだが、ここがなかなか難しいや。みんなが困ってて、お供えしたくなるほどの困りごとで、ちゃんと効いたな、ご利益があったなってもものにしなくちゃいけない」

「うーん。確かにそうだな。なかなか難しいや。どうすんの？」

「向こうは赤んぼの夜泣きだろ？ だからこっちはそれに対抗して、おじいちゃんの寝言だ」

「おじいちゃんの寝言？ おじいちゃんの寝言が治るの？」

「そうさ。もうみんなおじいちゃんの寝言がうるさくて日々、困ってるわけだろ？」

「そうなの？ おれあんまりそんなの聞いたことないけど」

「それはお前がたまたまそうなだけさ。おれなんか、毎晩うるさくてなかなか寝られねえもん」

「あ、そう。え、お前のとこのおじいちゃんはどんな寝言を言うの？」

「そりゃ『ああ、うまいなあ。この刺身は』とかな。『ああ、うまいなあ、この煮つけは』とかな。

『ああ、なんてうまいんだ、この米は』とか」

「お前のとこのじいちゃんは夢で食ってばかりいるんだな」

「そうなんだよ。うるさくてしょうがねえ。で、そうやって困ってる人が大量にいるわけだから、おじいちゃんの寝言で決まりだ。隣り町内や遠方から、おじいちゃんの寝言に困ってる人たちが集まって来ると」

「でもよ、それ本当に効かなくちゃいけないんだろ？ インチキでやってんだから、効かねえぞって文句を言ってくる人も出て来ねえか？」

「そりゃ大丈夫だよ。いつかは絶対に効くよ。そのまま寝て起きねえ日があるんだから」

「ええ？ それ効いたって言うかね？」

「当たり前じゃねえか。寝言はなくなるわけだろ？」

「まあ、そうだけど。じゃあ、ご利益はおじいちゃんの寝言がなくなると」

「そうそう」

「あれ、ところで肝心の地蔵はどうすんの？ お前べつに何も持って来てねえみてえだけど。地蔵をこしらえるんじゃねえのか？」

「お前なにを言ってんだよ。地蔵なんてものを昨日今日でこしらえられるわけがねえじゃねえか」

「そうか。え？ じゃあどうすんの？」

「まだ分からねえのかよ。元ちゃんだよ」

「は？ 元ちゃん？」

「そうだよ。地蔵だよ」

「いやいや、人じゃん」

「人だよ。でも地蔵役をやるんだよ。この町内で一番の地蔵顔は元ちゃんだもん。なあ？」

「ええ、なんだかよく分からないけど、地蔵をやることになったんで、よろしくお願いします」

「大丈夫？ なんだかよく分からないけどって言ってるけど。この企画の趣旨は伝わってんの？」

「当たり前じゃねえか。儲けは三人で山分けなんだから。元ちゃんにもちゃんと銭が入るようにするんだよ」

「ちょっと元ちゃんの負担がでかい気がするけどね。地蔵役の人が来るとは思わなかったよ」

「大丈夫だよ。ただ立ってるだけなんだから。で、誰も来ない夜中なんかはいったん帰っていいわけだし」

「あ、いったん帰っていいんですね。これは助かります。どうもありがとうございます」

「心配だなあ。夜中にいったん帰宅する地蔵なのか。え、じゃあ、元ちゃん地蔵に鯛をお供えすると、おじいちゃんの寝言がなくなると」

「そういうことだ。お前は頑張って鯛をたくさん売ってくれ」

「う、うん。で、お前はどうすんの？」

「おれ？ おれはサクラだよ」

「サクラ？」

「おお。よく考えてみろ。お供えもご利益も決まったって、その説明がなんもなかったら、地蔵じゃなくて、ただここに立ってる元ちゃんになっちゃうだろ」

「ほんとだ。そりゃそうだ」

「だからよ。おれがまずお前のところで鯛を買って、ここへ来て『いやあ、これがあの有名な鯛地蔵かあ。これで長年困っていたおじいちゃんの寝言がなくなるんだよな。よーし』と言って、元ちゃんの前に鯛を置くと。で、手を合わせる。つまりサクラだ」

「なるほど。演技力も必要になってくるね」

「そうだろ？ まあ台本を感じさせない自然な演技と言え、おれの出番だ」

「それは聞いたことはなかったけど。じゃあ、それで決まりでいいのね？」

「おう。じゃあ、元ちゃん、ここで地蔵の形で立っておいてくれ。頼んだよ」

「うん、任せとけ」

間抜けな企画が立ち上がりまして。誰もまともな人がいないという状況で。

「…。あ、地蔵だから目をつむっておかなくちやいけねえか。まあいいか。六ちゃんが鰯を持って来たら、つむろう。あれ？ 地蔵って手はどうしてるんだろう。こうかな？ こうかなあ。うーん。まあいいか。六ちゃん早く来ねえかなあ。地蔵役だなんて、ただこうして立ってるだけで儲けられるなんて六ちゃんは天才だね。うん。早く来ねえかなあ。あ、来た来た。おーい、六ちゃん！こっちこっち！」

「ばかやろう！ 地蔵が声を出すんじゃねえや。お前はずっと黙って立ってりゃいいんだよ」

「あ、そうかそうか。ごめんごめん」

「いやあ、これがあの有名な鰯地蔵か。これで長年困っていたおじいちゃんの寝言がなくなるんだよなあ。よーし、魚屋で買ってきたこの鰯をここにお供えしてっと！」

「…。行っちゃった。鰯。まさかこいつも地蔵にお供えされるとは思わなかっただろうなあ。誰か来るかな」

「あれ？ あそこにいるのは元ちゃんじゃない？ なにやってんだろうな。おい、元ちゃん。そんなところで何してんの？」

「…」

「なんだよ。返事もしねえで。あれ、鰯が落ちてるよ。なんであんなところに鰯が落ちてんだ？ 見ろよ。野良猫が寄ってったよ」

「…。おい、おい。駄目だよ。それ持ってっちゃ。それお供え物なんだから。お前の餌じゃないんだよ。駄目だって！ あーあ。くわえて持ってっちゃったよ。また六ちゃんに来てもらわないと。あ、六ちゃん来た」

「あれ？ なんだよ。鰯がなくなってるじゃねえか。おい、どうしたんだよ。まさか生で食ったのか？」

「…」

「今は喋っていいから！ 鰯はどこ行ったんだよ」

「喋っていいの？ いや、さっき野良猫が持ってっちゃったの。悪いんだけどさ、もう一回やってくれない？」

「仕方ねえなあ。ちょっと待ってろ」

「悪いね！ …あれ？ さっきの猫が戻ってきた。なんだかもう一匹連れてるよ。そうか、このへん野良猫が多いもんなあ。あそこで鰯が手に入るぞなんて、猫の間で噂になってるんじゃないだろうね。あ、六ちゃん来た」

「いやあ、これがあの有名な鰯地蔵か。これで長年困っていたおじいちゃんの寝言がなくなるんだよなあ。よーし、魚屋で買ってきたこの鰯をここにお供えしてっと！」

「…。行っちゃった。ああ、来た来た。また寄って来たよ。駄目だって！ お前たちの餌じゃない

んだよ。いけないよ！ もう、どうしよう。いくら鰯を置いてもみんな猫に持ってかれちゃうよお」

「なあ、ちゃんとお前サクラやってんだろな」

「やってるよ。お前のところで鰯を買ったじゃねえか」

「でもよ。今のところ鰯を買ってったのお前だけなんだよ。どうなってんだい。これじゃあただ仲間内で買っこしてるだけじゃねえか」

「そうだけど。おかしいなあ。大量に鰯が売れる算段だったんだけど。…ん？」

「おーい。六ちゃん、半ちゃん！」

「あれ？ 地蔵がこっちに向かって来るぞ。何やってんだ、お前。駄目だよ、ちゃんと持ち場にいななくちゃ。あれ？ 地蔵の後ろを大量の猫がおっかけて来るよ。元ちゃん、何をやってんだよ！ 猫を引き連れた動く地蔵って、怪談覗みてえになってるじゃねえか！」

「違うんだよー！ こいつらもっと鰯をよこせってついて来ちゃうんだよ」

「ああ。仕方ねえ。じゃあそいつらにも協力してもらおう」

「協力？ どうすんの？」

「おれたちはこれから大儲けするんだから、忙しくなるから猫の手も借りよう」

おわり